

社会技術研究開発事業
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する
持続可能なコミュニティ構築」

片桐 恵子
神戸大学 ウェルビーイング先端研究センター 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	3
2-3. ロジックモデル	4
2-4. 実施内容・結果	5
2-5. 会議等の活動	26
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	29
4. 研究開発実施体制	30
5. 研究開発実施者	31
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	34
6-1. シンポジウム等	34
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	34
6-3. 論文発表	34
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	35
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	36
6-6. 知財出願	36

1. 研究開発プロジェクト名

都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

目標1. こころと身体から見た社会的孤立・孤独の関連をあきらかにする スモールスタート期間の開始時に[調査1]グリーンヒルズ六甲の50歳以上の住民全員に質問紙調査を行う。その中で孤独度(低・中・高群)毎にモニターをリクルートし、[調査2]モニターを対象に、インタビュー調査、[調査3]運動機能(最大筋力、筋厚、平衡機能)・自律神経活動・感情関連ホルモン・認知機能を測定し、[調査4]モニターを対象に、ICTを利用した毎日のデータ取得を行う。[調査1]~[調査3]はスモールスタート、本格研究開発期間の開始時と終了時の計4回の縦断調査。これらのデータを統合し、孤独と健康の関連を明らかにする。スモール期間・本格研究期間終了時に、本プロジェクトの効果検証を行う。

目標2. 既存ネットワークの連携とバーチャル・コミュニティの融合 既存グループについては、新たな協力グループを募って、活動数や内容を拡大させる。

バーチャル・コミュニティについては、ワイがやカレッジに参加した高齢者から協力者をリクルートし、学生とともに自身のアバターを作り、学生と高齢者の間で、また、住民同士がオンライン・コミュニティで交流する。

目標3. 住民リーダーの育成 本研究開発で実施している「ワイがやプロジェクト」、神戸大学によるアカデミックサロン、サイエンスカフェ、哲学カフェ、などの生涯学習イベント、YYカフェの活動、KIITO実施の食イベント、既存の活動グループなどへの参加者たちに対して、民生委員や六甲摩耶安心すこやかセンターの担当者などから、個別に手伝いを頼み、徐々に地域問題解決をする人材を育成していく。地域の問題解決について話し合うタウンミーティングの開催などにより、問題点の解決の仕方などを自律的に考え、実行するように促す。

目標4. サードエイジ・ユニバーシティによる人生100年時代のレディネス/レジリエンスを高める スモールスタート期間と同様、本研究開発で実施している「ワイがやプロジェクト」、アカデミックサロン、サイエンスカフェに加えて、神戸大学大学院人間発達環境学研究科内組織のヒューマン・コミュニティ創成研究センターの協力を得て、サードエイジ期に自己を問い直し、これからの生き方を考えてもらう哲学カフェを実施する。また、KIITOの協力を得て、地域のソーシャル・ビジネスの立ち上げ方講座なども開催。高齢期を豊かに生きるための情報を提供していく。

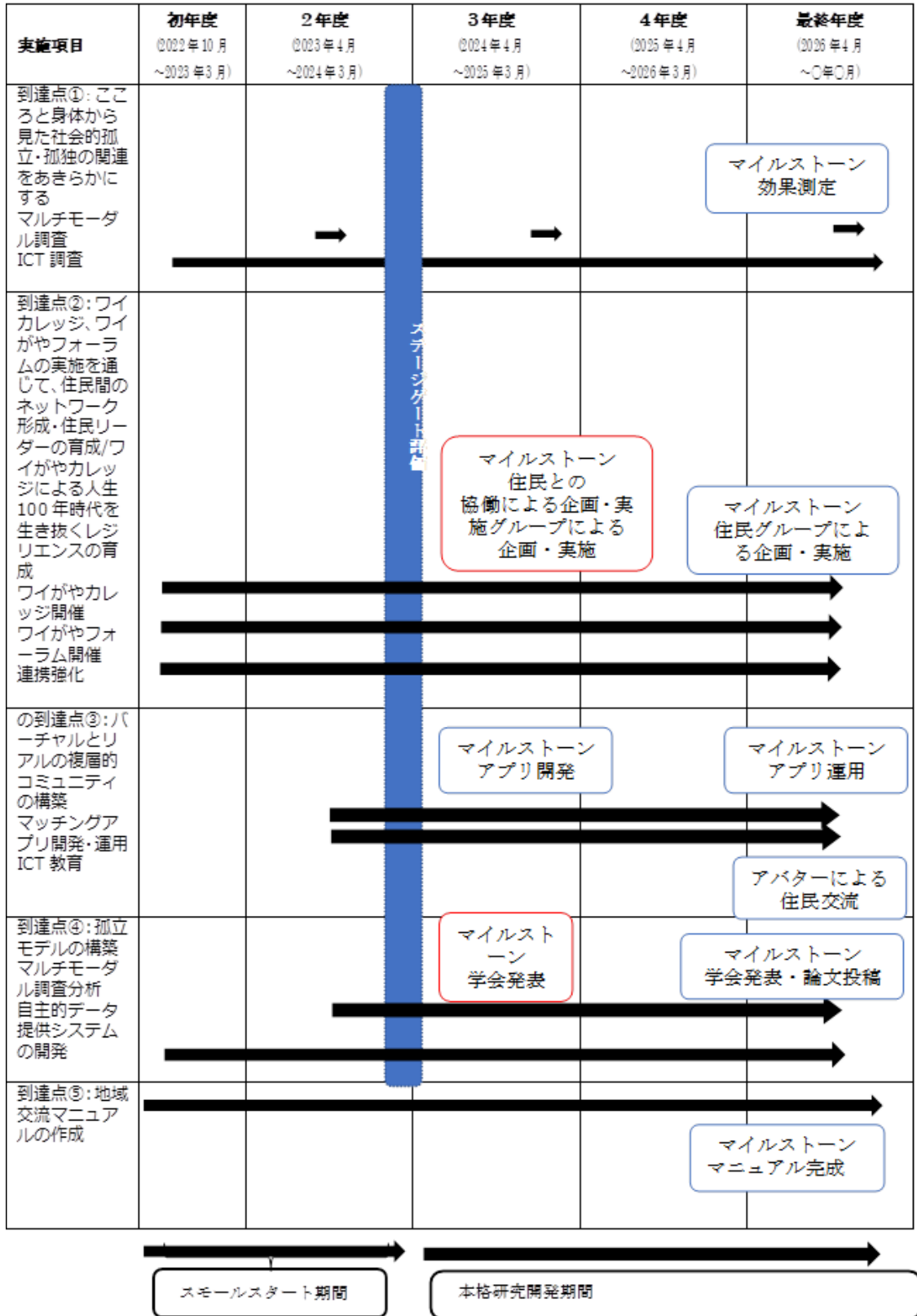
目標5. 孤立予想モデルの構築 本格研究機関での調査データも加え、孤立を予想するモデルの精緻化を図る。また、スモールスタート期間で協力企業を探し連携して、商品やサービス開発を行い、試験的な運用を始める。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. 住民向けイベントの開催で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するの
か
- Q2. 住民向け生涯教育の実施で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するの
か
- Q3. 生涯学習の実施による高齢期の生き方に関する啓蒙は、人生100年時代に当たり、孤
独・孤立を防ぎ、well-beingの高い高齢期を実現するのに有効であるのか。
- Q4. 住民間のリアルとバーチャルの複層的なネットワークの構築により、住民間の絆は強
まる/拡大するの
か
- Q5. 住民向けイベント・生涯教育の実施により、地域の担い手を育成できるのか。

2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



(2) 各実施内容

① 住民向けイベントおよびワイがやフォーラムの実施

(目標)

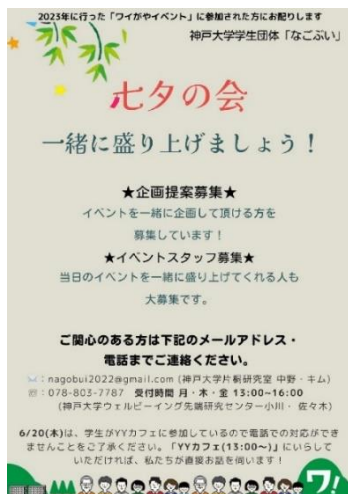
地域住民の交流機会を創出・提供する。加えて、地域住民同士で交流することの良さを実感できるようにする。

(実施内容)

● 第3回ワイがやフォーラム「七夕の会」(2024年7月7日)

ワイがやプロジェクトを中心として、神戸大学の学生団体と地域ボランティアグループYYカフェの共催で第3回ワイがやフォーラムを行った。ワイがやフォーラムではゴム鉄砲、コマ回し、輪投げ、お手玉といった伝統遊びを題材とし、年代を問わず楽しめる企画を準備することとした。

第3回ワイがやフォーラムの企画を進めるにあたり、ワイがやプロジェクトでの検討事項であった地域住民を巻き込んで進めることを試みることにし、これまでのワイがやフォーラムやワイがやカレッジに参加したことのある住民に限定して協力を募ることとした。そこで、企画提案やイベントを盛り上げてくれる人を募集する旨を記載したチラシを作成し配布した。その結果、住民3名から協力の申し出があり、七夕の笹につける飾りづくりなどを引き受けていただいた。加えて、地域ボランティアグループYYカフェとは、ワイがやフォーラム開催案内のチラシ作成の段階から打ち合わせを始め、チラシの内容だけでなく、気軽に立ち寄れる雰囲気づくりの仕掛け、役割分担などワイがやフォーラム全体に関して話し合いを重ねた。YYカフェには、コーヒーコーナーの担当も依頼した。この七夕の会で初めて、企画当初の段階から、過去にワイがやプロジェクトに参加した人という限定付きではあるが住民から自発的な協力が得られ、YYカフェと密に連携して動くことができたと言える。



企画・スタッフ募集のチラシ



第3回ワイがやフォーラムの地域への案内のチラシ



第3回ワイがやフォーラムでは事前参加申し込みを不要とし、時間内の出入りは自由としたことも功を奏し、小学生から90代までの68名の来場を得た。会場内の各種の伝統遊びの場では、おとなが子どもに、子どもがおとなに遊び方を教えあう様子や、子ども同士は

競争したり、おとな同士は昔を懐かしみながら伝統遊びに興じる様子が見られ、非常に和やかに住民同士の交流が行われた。またコーヒーコーナーは、初対面の住民同士が座って落ち着いて会話できる場として有効であった。

第3回ワイがやフォーラム「七夕の会」の実施を通じて、地域のイベントに積極的に関わろうとする住民がいるという感触を得られたので、プロジェクトとしてワイがやパートナー（③にて後述）の募集を本格化させることとした。

● 第4回ワイがやフォーラム「ワイがやウィンターパーティ」（2024年12月21日）

住民向けイベントとして昨年度に引き続き第4回ワイがやフォーラムを実施した。今回はフィールドにおける住民主体の地域づくりに向けた試みとして、住民のなかから募ったワイがやパートナー（③にて詳述）とともに開催に向けて準備を進めた。

第4回ワイがやフォーラム開催に向けてワイがやパートナーとのミーティングは10月末からフォーラム前日までに6回行った。各回のミーティングの要点は以下の通りであった。

2024/10/30	フォーラムで「何をしたいか」についてブレインストーミングを行った
2024/11/11	ブレインストーミングの内容をもとに、フォーラムで何をするかについて絞り込みをした
2024/11/23	フォーラムで実施する内容を確定した
2024/12/5	フォーラム当日の具体的な内容の共有と役割分担をした
2024/12/13	当日までに各自で準備することの割り振りをした
2024/12/20	翌日のフォーラム当日に来場者を迎えるために、会場のレイアウトと集会所のクリスマスの飾りつけを行った

当初は、フォーラムの開催の主体を住民とし、研究室側はバックアップをしようと考えていたが、住民にも研究室側も初めての取り組みであり、進め方に難しさを感じた。これまでのフォーラムやカレッジの運営の様子から、どうしても住民側は研究室側が「やってくれる」という気持ちがあり、「指示してくれたら動くから」などと言われたこともあった。

ワイがやパートナー同士はLINEオープンチャットでつながり、ミーティングで決めきれなかったことや、ひらめいたことなどをやり取りしあった。メッセージのやり取りで印象的だったことは、一度も悪い雰囲気にならなかったことである。メンバー全員がワイがやフォーラムを成功させたいという気持ちで同じ目標に向かっていなかったかと考えている。

ワイがやパートナーのミーティングを経て確定したチラシは、グリーンヒルズ六甲全住戸に2回配布した。1回目のチラシでは、ワイがやパートナーと研究室メンバーで企画内容を検討の段階で、未確定の内容が多かったので予告的な内容となった。2回目のチラシでは、イベントの内容が具体的に伝わるようにした。2回目のチラシでは、近隣地域である鶴甲地区に鶴甲地区連合自治会の許可を得て、広報掲示板16ヵ所に掲示を行うことで、参加者の拡大を図り、併せて自治会のホームページにチラシを掲載してもらった。



第4回ワイがやフォーラムの1回目のチラシ



第4回ワイがやフォーラムの2回目のチラシ

当日は、前日に飾りつけをした手作りクリスマスツリーに来場者が自由に飾りつけをしたり、松ぼっくりをクリスマスツリーに見立てビーズなどで飾りつけができるコーナー、ピン立てゲーム、笑ったサンタクロースの口に仕立てた箱に玉を入れるゲーム、オトナのクリスマス会、YYカフェのカフェコーナーを用意した。事前申込不要としたこともあり、時間内に人が入れ代わり立ち代わり訪れ55名が来場した。時間中に2回、学生がサンタクロースの衣装を着てプレゼントを配り、クリスマスの雰囲気盛り上げた。当日のメインイベントとして、プレゼント交換会を行った。これは、ワイがやパートナーからの「全員がプレゼントをもらえると嬉しいと思う」という発言から企画した。来場者に「自分は使わないけれども、誰かはもらうと喜ぶだろう」というものをラッピングして持ち寄ってもらい、当日の後半の時間帯で「リサイクルでうれしいプレゼント交換会」として、来場者全員がどれかひとつ自分で選んで持ち帰ることができる、というものである。来場者以外とワイがやパートナー、URの方、研究室メンバーなどを合わせると70名を超える人がおり、全員がいっぺんに選ぶことはできなかつたので、子ども→おとな→ワイがやパートナーと研究室メンバーの順でひとつずつ選び、大いに盛り上がった。

ワイがやフォーラムは、地域住民同士の交流の機会となるよう工夫して開催している。そこで今回は、集会所の和室で開催した「オトナのクリスマス会」の空間も同時に設けた。70～90年代の懐かしい音楽と、スペシャルドリンクとしてホットワインを用意した。音楽は、事前のチラシでリクエスト受付のQRコードを付け、聞きたい曲を受け付けた。また、来た人は初対面の場合もあるので、話のきっかけとなるような話題カードを置いて適宜使用した。集会室のにぎやかな雰囲気とは異なり、オトナの部屋ではホットワインを飲みながらさまざまな思い出話などで落ち着いた雰囲気であった。なかには、「この和室がこんなに居心地がいいとは思わなかった。自宅にあるワインを一人では飲みきれないし、みんなでここに集まって飲みませんか」と声を掛け合う場面もあり、地域の人同士の出会いと今後の交流に一役買うことができた。

② 住民向け生涯教育「ワイがやカレッジ」実施
(目標)

2023年度に引き続き、人生100年時代を生き抜くためのレジリエンスを高めるための生涯教育「第2期ワイがやカレッジ」を実施。社会的孤立や孤独が、幸せな高齢期を過ごすためにマイナス面がある事を理解してもらうことで、社会的孤立・孤独の一次予防を図る。また、併せて地域住民の交流機会も提供する。2024年度は、地域の特性が異なる鶴甲地区をカレッジの案内をする対象に加え、住民同士のつながりの拡大を試みた。周知にあたっては、グリーンヒルズ六甲にはチラシの全戸配布、鶴甲地区は鶴甲地区連合自治会のホームページと掲示板を活用した。

(実施内容)

● 第1回ワイがやカレッジ「ウェルビーイングってなんだろう？」(2024年11月3日)

本プロジェクトの代表者である神戸大学ウェルビーイング先端研究センター教授の片桐恵子より、ウェルビーイングの概念の紹介や生きがいなどについて紹介された。

新たに加えた地区からの参加者がいることと年度初回ということもあり、グループワークの前にアイスブレイクとして自己紹介の時間を設けた。引き続いてのグループワークでは、人生100年のためのロードマップの資料を材料に、住む地域や住居、誰と住むのか、身体状況、生活資金、友人・知人、挑戦したいことなどについて、60代から90代までの自分がどのように想定しているのかを話し合ってもらった。まさに今、その年代にある方々が集まっていることもあり、グループワークでは各自の現在から想



第1回ワイがやカレッジのチラシ

像される今後のことまで活発に話し合う様子があった。45歳から92歳までの38名（申し込み51名）が参加した。

● 第2回ワイがやカレッジ「暖かい住まいで健康に暮らそうーヒートショックから身を守る」(2024年11月23日)

プロジェクトメンバーである神戸大学ウェルビーイング先端研究センター学術研究員の小川まどかより、自宅での被害の発生が増えるヒートショックをテーマとした講義をした。ヒートショックがなぜ起こるのか、入浴で気を付けること、暖かく安全に暮らすためにすぐにできるひと工夫などが紹介された。

講義の後には7-8人でグループとなって、各人が冬にドキッ・ヒヤッとした経験やヒートショック予防として工夫していることを話し合うグループワークを行った。六甲は、冬は風が強く寒さが厳しい地域柄、ヒートショックによって倒れた経験を持つ人も参加者のなかにいたこともあり、各グループでは、本人や家族の経験談やヒーターを置くことの効果、六甲地域での銭湯の場所などを教え合う様子があった。57歳から92歳までの36名（申し込み41名）が参加した。



第2回ワイがやカレッジのチラシ

● 第3回ワイがやカレッジ「ICTで超高齢社会に備えようー在宅で自立生活を送るための情報通信技術」(2025年1月26日)

本プロジェクトのバーチャルグループのリーダーである神戸大学数理・データサイエンスセンター中村匡秀教授より、超高齢社会において情報通信技術が在宅での自立生活にどのように役立つのかを学んだ。本プロジェクトで開発を進めているVAメイちゃんの紹介とデモンストレーションも行われ、想像以上の機能があることに驚いたという声が多く聞かれた。メイちゃんとの対話がテキスト化され記録されることで、離れたところに住む家族に高齢となった自身の様子を見守ってもらえる安心感を持ってそうだ、忘れてくない予定や出来事をメイちゃんに向かって話すことで覚えておいてもらえて、後から振り返るのは便利だ、ひとり暮らしだと機械であっても返事の返ってくる相手がいるのは嬉しいのかもしれない、などのポジティブな発言が多く聞かれた。講義のあとは、実際に各自でメイちゃんと話す体験をし、グループワークではメイちゃんに支援してもらいたいこと、加わ

ると良いなと思う機能などを話し合った。服薬のリマインダー、近隣で行われるイベントを教えてほしい、スケジュール管理をしてほしい、インターネットでのショッピングのサポートをしてほしいなど、自分の生活を思い起こしながらメイちゃんに備わってほしい機能が活発に話し合われた。9歳から93歳までの57名(申し込み71名)が参加した。



第3回ワイがやカレッジのチラシ

● 第4回ワイがやカレッジ「A COFFEE & WAIGAYA DAY シニアコーヒーチーム「淹」がやってくるヤァ!ヤァ!ヤァ!」(2025年2月15日)

神戸にあるスペシャルティコーヒーショップ代表の上野真人氏から、コーヒー豆やコーヒーが消費者にどのように届くのか、またコーヒーを通じた地域の社会問題の解決の取り組みについて学んだ。加えて、デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)の加藤慧氏からは、「ワクワクする高齢社会」「誰かのために活動すること」などを目指してKIITOが企画してきたパンじい、コーヒーチーム淹、大人の洋裁教室の紹介があった。活動メンバーの「70歳を過ぎて友達ができた」「外に出る機会が増えた」といった意識や行動の変化や、地域活動への参加意欲などのエピソードを伺った。これらの座学のあとには、上野氏の指導により定年後にコーヒーの技術を学び、その後に地域活動などに出演して活動しているシニアコーヒーチーム「淹(えん)」の協力を得て、コーヒーを淹れる体験と、さまざまな銘柄のコーヒーの飲み比べ体験をした。コーヒーと一緒にお茶菓子を楽しみながら、参加者同士で近隣の美味しいカフェや好みのコーヒーのことなどを話しながら交流をしている様子がみられた。58歳から93歳まで35名(申し込み32名)が参加した。



第4回ワイがやカレッジのチラシ

- 第5回ワイがやカレッジ「第二期終業式 “つなぎ”のデザインで生まれる「まちの部活動」」(2025年3月9日)

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) の加藤慧氏に講師を依頼し、人が集まり交流することで、アイデアや工夫が生まれるというKIITOの取り組みの姿勢を主軸とした講義とグループワークを行った。講義では前回に引き続き「ワクワクする高齢社会」「誰かのために活動すること」などを目指してKIITOが企画してきたパンじい、コーヒーチーム淹、大人の洋裁教室の紹介と、参加しているメンバーから語られた失敗談や嬉しかった、楽しかったことなどのエピソードの紹介がされた。

続いて「まちの部活動を考える」というテーマでグループワークを行った。「〇〇部、〇〇サークル、〇〇チームを考える」とし、まずはひとりで思いつく限り付箋に書き出した後、隣の人とアイデアを共有しながら意見交換したら、グループ内でアイデアを共有し、最後にグループごとにお気に入りのアイデアを発表した。URは入居者の入れ替わりが多いという特徴があり、居住歴が浅い人も多くいるために「まち歩き/散歩/ウォーキング/遠足部」がいくつかのグループから発表された。他には、ヨガ、料理、ご近所キャンプなどが発表された。

グループワーク中は、どのグループでも話が良く弾んでいる様子がみられた。これまでのワイがやカレッジでのグループワークは短い時間しかとれなかったが、今回はグループワークをメインとして十分な時間をとっていたこともあり、互いの知らなかった趣味や一面に触れる機会となった。ワイがやカレッジの終了後、グループワークで盛り上がったあるグループでは、LINEを交換し、グループチャットを作る等、ワイがやカレッジをきっかけに新しいアクションにつながる兆しがみられた。

当日は2024年度ワイがやカレッジ終業式としており、全5回に皆勤した13名にオリジナルグッズと皆勤の表彰状を進呈した。58歳から93歳までの31名(申し込み32名)が参加した。



第5回ワイがやカレッジのチラシ

③ 住民の主体的な参加としての「ワイがやパートナー」との関係づくり

①で述べた通り、フィールドにおける住民主体の地域づくりに向けた試みとして、住民全体から「ワイがやパートナー」を募った。ワイがやパートナー募集にあたり、当初は募集のチラシをポスティングするだけで住民からの連絡を待つかたちで進めようとしたが、私たちの考えや気持ちを直接伝えられる場を作り、賛同してくれる人に加わってもらほうが良いのではないか、という提案を受け、説明会のかたちでパートナーミーティングを行うこととした。パートナーミーティング開催の案内チラシには、地域でイベントを作りたいこと、それに向けて「こんなことがあればいいな」「私、こんなことができます」「地域活動に興味があります」「みんなでワイワイするのが好き！」という思いを持つ人同士、まずは地域の人と集まろうというメッセージを記載した。チラシはグリーンヒルズ六甲の全戸に2回配布した。

説明会は、金曜夜、翌週土曜午前・午後の計3回開催し、なるべく多様な方が参加できる工夫をした。説明会ではワイがやプロジェクトが地域の緩やかな絆づくりを目指していること、七夕の会では研究室メンバーのアイデアを地域住民と形作る過程で住民から多くの刺激を受けてより良いものを目指せたことなどから、これから、最初から住民同士が集まって一緒に始めることで、新しく楽しめる企画が作れるのではないか、という提案をした。

その結果、説明会に参加した9名と説明会に参加した方やプロジェクトの事務局の勧誘から趣旨に賛同した2名を含め、総11名のワイがやパートナーが結成された。なお、メンバーは、男性4名、女性7名、36～83歳で、現役で仕事をしている人や民生児童委員、既に定年退職している人など、さまざまな背景を持っていた。メンバー同士は、LINEのオープンチャットで連絡を取り合った。

ワイがやパートナーの最初の活動が、先述の第4回ワイがやフォーラム「ワイがやウィンターパーティ」となった。

ワイがやパートナーには、2025年1月に活動への参加のきっかけや活動継続の希望を尋ねる自記式アンケート調査を実施した（(3)成果にて詳述）。

The image contains two promotional posters for the 'Wai-ga-ya Project' (ワイガヤプロジェクト).

Left Poster: Partner Meeting
 Title: みんなで六甲台に新しいワ!をつくらう (Everyone at Rokko-dai, let's create a new 'Wa'!).
 Content: A 2023 retrospective of the project, a goal for 2024 to design events together, and a call for participants. The meeting is held at Green Hills Rokko-dai.
 Dates: 10/11 (Fri) 18:30-19:30, 10/19 (Sat) 10:30-11:30, 10/19 (Sat) 14:00-15:00.
 Location: グリーンヒルズ六甲団地 集会所 (Green Hills Rokko-dai Community Center).
 Logos: 神戸大学 (Kobe University), 住友不動産 (Sumitomo Real Estate), RISETEK.

Right Poster: New Event
 Title: この冬、六甲台に子供からシニアまで力を合わせて新しいイベントをつくりたい! (This winter, let's create a new event together at Rokko-dai, from children to seniors!).
 Content: A call for participants from various groups (Wai-ga-ya Project, YWCA, etc.) to create a new event on December 21st at Green Hills Rokko-dai.
 Date: 12月21日(土) 午後 9時 (December 21st, Saturday, 9 PM).
 Location: グリーンヒルズ六甲団地 集会所 (Green Hills Rokko-dai Community Center).
 Details: A list of participating organizations and a list of activities like 'Wai-ga-ya' and 'YWCA' are provided.
 Contact: 神戸大学ウェルビーイング先端研究センター (Kobe University Well-being Frontier Research Center). Email: jst-katagin@harbor.kobe-u.ac.jp, TEL: 078-803-7767.

ワイガヤパートナーミーティング開催の案内

④ ホームページやSNSによる情報発信

毎回のイベントや、イベント前のワイがやパートナーとの打ち合わせの様子などを、Facebookでこまめに情報発信することに努めた (<https://www.facebook.com/profile.php?id=100095267089127>)。



六甲ぐらしワイがやフォーラムのFacebookページより

⑤ ワイがやプロジェクトの情報共有と参加促進のための「ワイがや通信」発行

第1期ワイがやカレッジが終わったまとめと、第2期が始まるまで期間があいてしまうことを考慮し、ワイがや通信ありがとう号を制作した(2024年7月発行)。2023年度ワイがやプロジェクト全体への参加者がグリーンヒルズ六甲600戸のうち約1割であることや、3～91歳までの多世代交流の場であることや、イベントを通じて緩いつながりをつくることのできることを数字にして伝える工夫をした。ワイがやフォーラムやワイがやカレッジの開催時に記入をお願いしているアンケートの自由記述をまとめ、参加者が感じた「良かったこと」「学んだこと」「惜しい」などの回答を抜粋して掲載した。加えて、第1期ワイがやカレッジに皆勤であった2名にインタビューし、ワイがやカレッジに参加したきっかけや良かったこと、得られたことなどを短い記事を作成した。

なお、ワイがやプロジェクト全体で参加の有無にかかわらず、次年度に向けて参加を促進できるようグリーンヒルズ六甲の全戸にポスティングした。



ワイガヤ通信ありがとう号 (2024年7月)

⑥ 追跡調査

2024年12月から2025年1月にかけてグリーンヒルズ六甲と鶴甲地区を対象に郵送によるアンケート調査を実施した。グリーンヒルズ六甲では、2023年10月にベースライン調査を実施しており、その追跡調査に位置づけられる。現在、結果の集計中である。

アンケート調査は、主に下記の内容であった。

- ・基本属性 (性別、生年、学歴、経済状況、健康度、婚姻状況、居住年数など)
- ・近隣との付き合い
- ・ソーシャルサポート
- ・ソーシャルキャピタル
- ・生活満足感
- ・抑うつ
- ・レジリエンス
- ・孤独感
- ・住環境 (ウォーカビリティ、歩行時の安全・快適さなど)
- ・ワイガヤプロジェクトの認知

⑦ バーチャルエージェントの開発

2024度は、バーチャルエージェントメイちゃんのモニターは計6名（男性4名、女性2名）で、うち一人暮らし男性は2名（80代、90代）であった。年齢範囲は70代～90代であった。一人はモニターのひとりから紹介されたグリーンヒルズ六甲以外の地域の男性であった。



メイちゃんとの対話以外に、新たなバーチャルツールの開発に着手し、随時改善をしている。

・メイちゃんを利用したもの

1) 地域情報紹介サービス

メイちゃんに、例えば「中華レストラン」と尋ねると、近隣の中華レストランを紹介してくれるというサービス。

2) Mei Message Service (研究者が自由に質問を設定できるサービス)

メイちゃんとモニターの音声会話は自動的にテキスト化され、ログとして蓄積されている。現時点では定例的な質問をメイちゃんが自動的に尋ねるようになっている（午前なら、「朝ごはんは何を食べましたか」など）。この仕組みを発展させ、研究者が聞きたい時間帯に、ICT研究者でなくても聞きたい質問を簡単に設定できるサービスを開発した。

・メイちゃんを利用しないもの

3) オンラインサークルサービス (バーチャルでのおしゃべり会)

近所の人が対面で会うとなると、実際は調整が大変であり、夜だと難しいなどいろいろな制約が生じる。そのため、バーチャル上で気軽におしゃべりができる仕組みをもったサービスである。

これらの3つについては、まだ実用には至っていない。試験的に作成し、テスト運用をし、修正する、という段階である。

(3) 成果

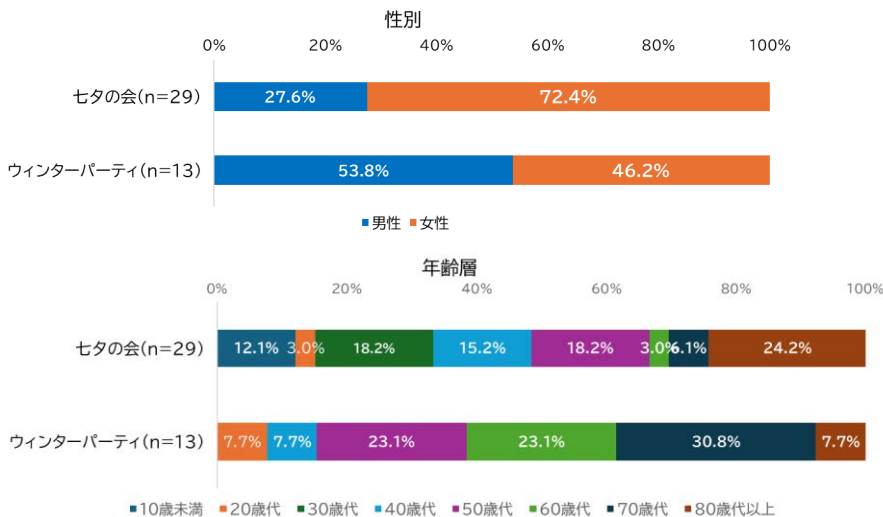
① 「ワイがやフォーラム」効果測定

(実施の目的と内容)

ワイがやフォーラムは、①年齢や性別に関わらず幅広いターゲットが参加できる、②参加型、体験型、③住民同士の交流機会の提供を目指した。七夕の会(2024年7月7日)および第3回ワイがやフォーラム(2024年12月21日)の開催時に来場者への自記式アンケート調査を実施し、効果測定とした。なお、アンケートへの回答は来場者に必須としなかったため、実際の来場者よりも少ない。

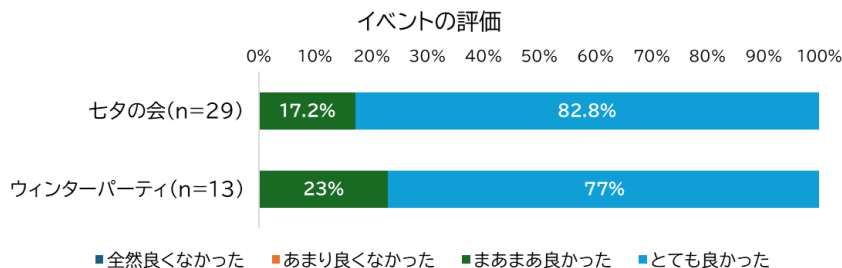
A. 性別・年齢層

来場者の性別では、七夕の会では女性が圧倒的に多かったが、第3回ワイがやフォーラムでは男女の割合が同程度であった。年齢層では、七夕の会では10歳未満~50代までで約65%と若い層にアプローチできたが、第3回ワイがやフォーラムでは50代までで約40%であり、どちらかといえば60代以上の高齢層に偏っていた。



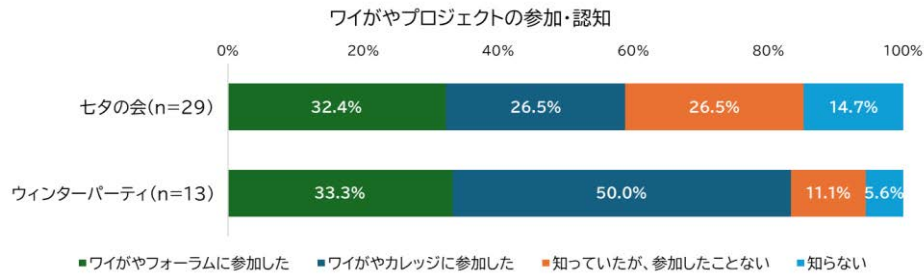
B. イベントの評価

当日のイベントの評価を尋ねた。いずれも「良くなかった」側の評価はなく、高評価を得られたといえる。



C. 来場者のワイがやプロジェクトの認知度

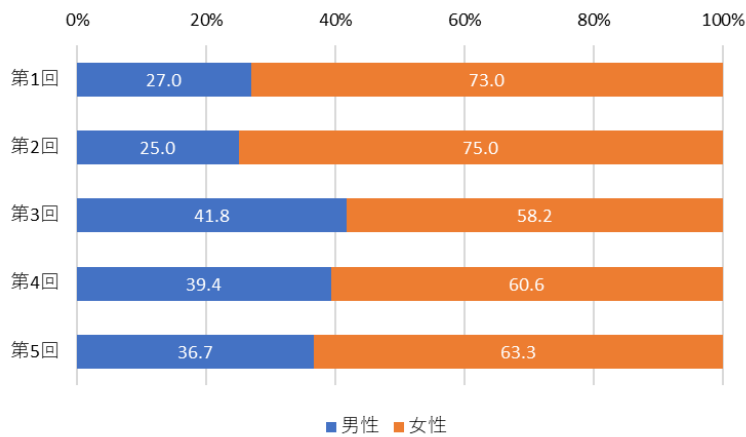
昨年度までのワイがやプロジェクトの活動が、住民にどれだけ認知されているのかを確認した。アンケートの回答からは、来場者のうち約60~80%は、過去のワイがやフォーラムやワイがやカレッジに参加したことのある人であった。知っていたが参加したことのない人も約10~25%はいること、また、知らないと回答した人もいた。この点については、ワイがやパートナーとの活動で情報を共有し、地域に根付かせるための方策を検討したい。



② 「ワイがやカレッジ」効果測定

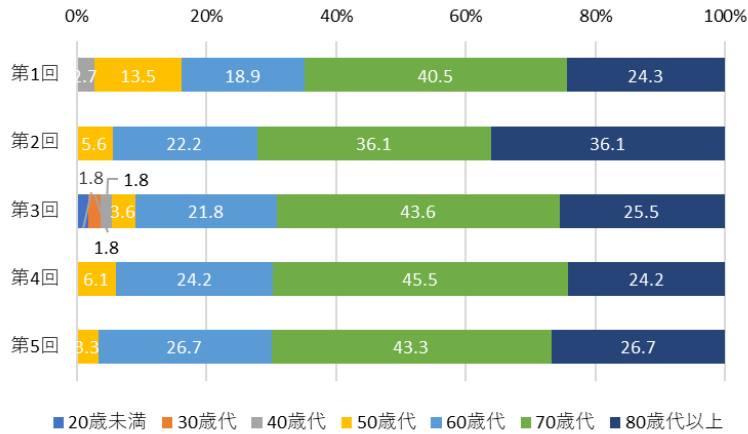
A. 性別

ワイがやカレッジ参加者を性別で見ると、男性：女性=1：2であり、女性の方が多い傾向であった。



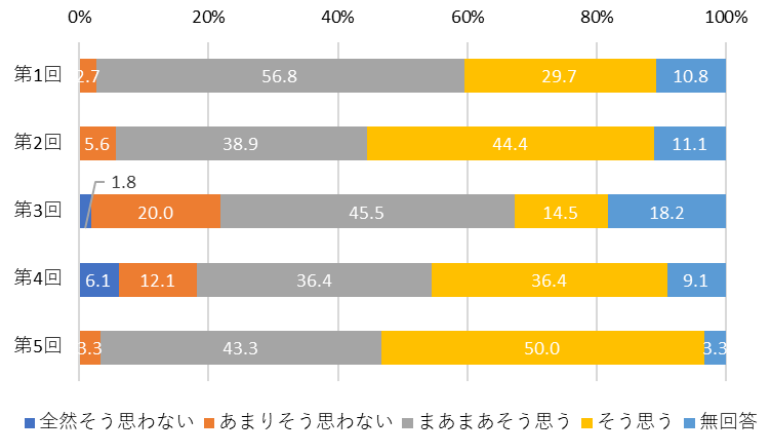
B. 年齢層

ワイがやカレッジ参加者を年齢層別で見ると、いずれの回においても60歳以上の参加で大半を占めていた。第3回「ICTで超高齢社会に備えようー在宅で自立生活を送るための情報通信技術」では、20歳未満～40歳代までの年齢層にアプローチできた。



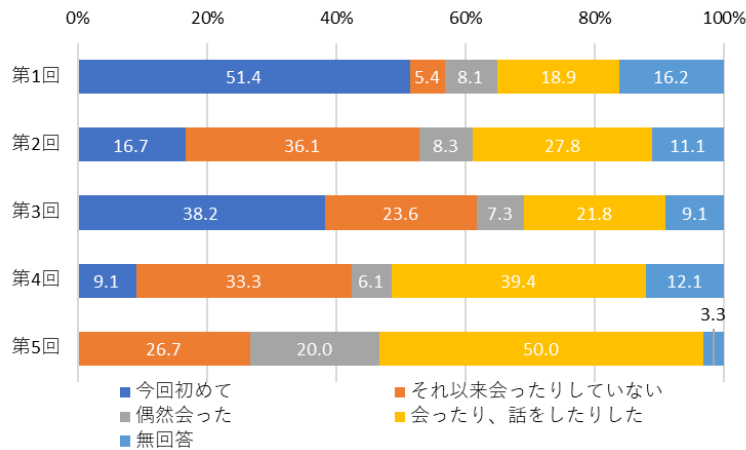
C. 同じグループのメンバーと話ができたか

ワイがやカレッジに参加した際に同じグループのメンバーと話ができたかを尋ねたところ、いずれの回においても「まあまあそう思う」「そう思う」の回答で大半を占めた。



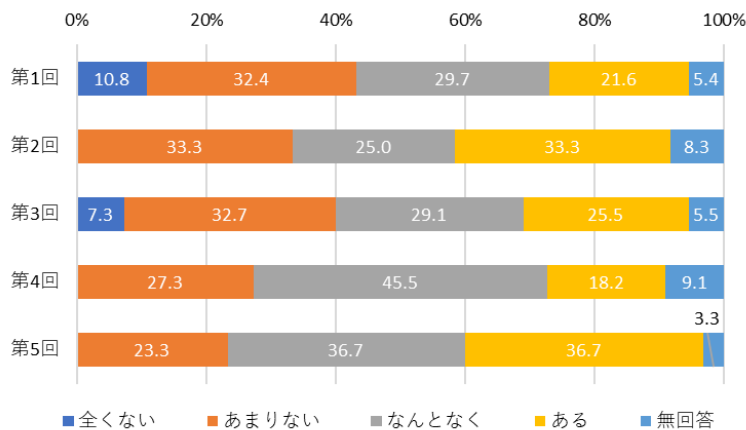
D. フォーラム・カレッジで初めて会った人とその後会ったか

ワイがやフォーラム・カレッジに参加した際に初めて会った人とその後会ったかを尋ねたところ、「会ったり、話をしたりした」の回答の割合が回を追うごとに増加傾向であった。一方で、「それ以来会ったりしていない」の回答の割合に変化はなく、その場限りの流動的な関係にとどまっているのかもしれない。



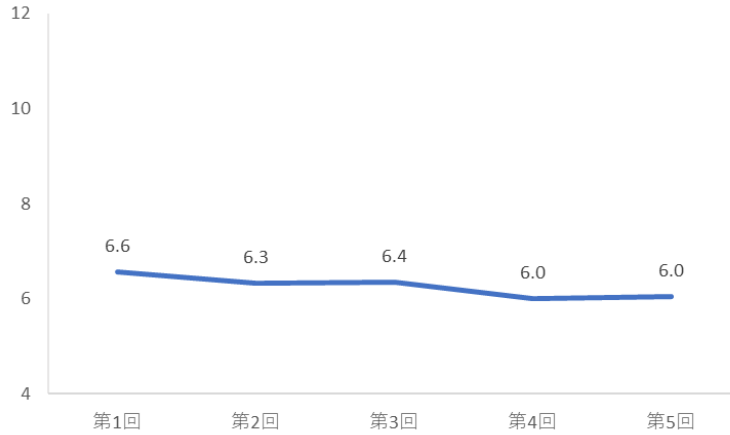
E. 地域の人とのつながりの実感

地域の人とのつながりの実感については、回を追うごとに「なんとなくある」「ある」を合わせた割合が増加していた。



F. 孤独感

孤独感はUCLA孤独感尺度を用いて測定した。ワイがやカレッジ参加者の孤独感得点はほぼ変化がなかった。



③ 「ワイがやパートナー」への調査

ワイがやパートナーに賛同した人を対象として、地域活動への参加に対して各人がどのようにとらえているのかを検討するためのアンケート調査を実施した。2025年1月に、ワイがやパートナーに自記式アンケート調査を送付し、回答を依頼した。アンケートの内容は、性別、年齢、学歴、同居者、婚姻、就業状況、主観的経済状況、主観的健康感に加え、ワイがやパートナーの活動への参加について尋ねた。活動への参加は、参加した理由、満足度、パートナー同士の交流、パートナー活動のメリット・デメリット、活動に参加するために必要な条件、活動の継続意向など、地域社会活動全般に関する質問であった。アンケートは、11名のパートナーの中、事情によりほとんど参加できなかった2名を除外し、9名に郵送にて送付した結果、8人から返送があった。ここでは、アンケートの結果の一部を記述する。なお、今後インタビューにより深堀調査を実施する予定である。

A. ワイがやパートナーの基本属性

ワイがやパートナーとして参加しアンケートに回答が得られた方の基本属性は表のとおりであった。男性3名、女性5名で、年齢は59～83歳までであった。3人はフルタイム勤務をしており、他は自営業主や無職等であった。

ID	性別	年齢	居住年数	就業状況
1	女性	83	5	無職
2	男性	76	5	自営業主
3	女性	70	5	自営業主
4	女性	78	55	その他・民生委員
5	女性	59	6	週労働時間30時間以上の従業員
6	男性	72	4	無職
7	女性	59	15	週労働時間30時間以上の従業員
8	男性	76	40	週労働時間30時間以上の従業員

B. 「ワイがやパートナー説明会」に参加しようと思った理由

2024年10月に実施したワイがやパートナー説明会に参加しようと思った理由を尋ねた。8人のうち7人が「地域活動に興味があったから」、5人が「ワイがやプロジェクトに参加したかったから」、4人が「地域デビューしたかったから」と回答していた。

ID	説明会に参加した理由
1	地域活動に興味があったから ワイがやプロジェクトに参加したかったから
2	地域活動に興味があったから 地域デビューをしたかったから ワイがやプロジェクトに参加したかったから 良くわからないけど楽しそうだったから
3	地域活動に興味があったから 地域デビューをしたかったから ワイがやプロジェクトに参加したかったから
4	地域活動に興味があったから 立場上仕方なく
5	地域活動に興味があったから 地域デビューをしたかったから
6	地域活動に興味があったから 地域活動に興味があったから
7	地域活動に興味があったから 地域デビューをしたかったから ワイがやプロジェクトに参加したかったから 良くわからないけど楽しそうだったから
8	ワイがやプロジェクトに参加したかったから 好奇心

C. 「ワイがやパートナー」活動に取り組むために必要だと思うこと

「ワイがやパートナー」活動に取り組むために必要だと思うことについて尋ねたところ、8人のうち6人が「健康であること」「一緒に活動する仲間がいること」、4人が「時間にあまり拘束されないこと」「精神的なストレスが少ないこと」「仲間に受け入れられること」、3人が「体力的な負担が重くないこと」と回答した。

活動に取り組むために必要だと思うこと	人数 (8人中)
健康であること	6
一緒に活動する仲間がいること	6
時間にあまり拘束されないこと	4
精神的なストレスが少ないこと	4
仲間に受け入れられること	4
体力的な負担が重くないこと	3

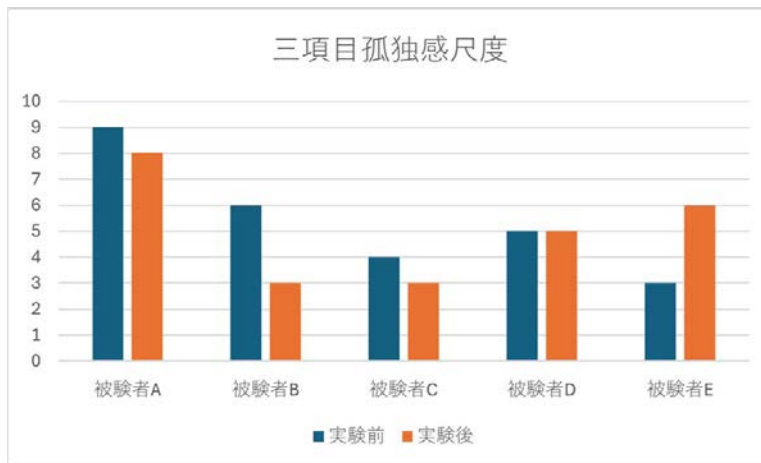
D. 「ワイがやパートナー」活動の今後の継続意向について

今後も「ワイがやパートナー」活動を継続する意向があるかを尋ねたところ、8人のうち4人が「そう思う」、4人が「まあそう思う」と回答した。

④ バーチャルエージェントの開発

A. メイちゃんとの会話は孤独感を緩和するか？

メイちゃん導入の前後にアンケート調査を行いUCLA孤独感尺度（3項目）の比較を行った。しかし、孤独点得点が減少した人も逆に上昇した人もおり、一貫した結果は得られなかった。



B. リアルワールドデータの学際的な分析

メイちゃんとの対話ログは毎日自動的に蓄積されるため、モニターの数はいくつか少ないが、ビッグデータになっている。この対話ログを材料として、マシンラーニングを用いて **positive**、**negative**、**neutral** に分類する感情分析を行った。分析の結果、**positive** 発言が多い、**negative** と **neutral** な発言が多いなど、人により違いがみられた。一方、マシンラーニングによる感情分析は自動的に行われるため、実際の人間の会話は同じ言葉でも **positive** であったり、**negative** な意味でつかわれたりする、というような文脈による違いは検討できない。そこで、社会老年学の質的な分析も行い、マシンラーニングとの違いを検討した。

質的な分析では、このような大量のデータは分析できないため、すべてのデータを名詞に分解する形態素解析を行い、そのなかで5回以上繰り返し言及された社会関係に関する単語をピックアップし、それらについて元の文章に戻り、どのような文脈で使われているかを確認する作業を行った。その結果、質的分析による **positive**、**negative**、**neutral** の分類とマシンラーニングの分類にはかなり違いがあることが判明し、マシンラーニングのプログラムの限界が明らかとなった。

この学際的な研究結果は、神戸大学研究基盤センター「若手フロンティア研究会2024」で発表し、オープン部門で優秀賞を受賞した。

(4) プロジェクトのResearch・Questionについて明らかになったこと

Q1. 住民向けイベントの開催で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するの
か

Q2. 住民向け生涯教育の実施で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するの
か

住民向けイベントと生涯教育は一連の流れの中で実施している。2回目の縦断調査の結果はまだ分析中であるが、ワイがやフォーラム・ワイがやカレッジにて実施しているアンケート調査の結果からは、確実に住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大している。

今後の課題は、これまで参加していない、新たな参加者をいかに増やしていくかということである。

Q3. 生涯学習の実施による高齢期の生き方に関する啓蒙は、人生100年時代に当たり、孤独・孤立を防ぎ、well-beingの高い高齢期を実現するのに有効であるのか。

通常の質問紙調査では、自由記述欄への記載はほとんどないが、本プロジェクトの質問紙調査のアンケート欄に、自由記述が多いのが特徴である。現在それらを分析中であるが、生き方について考えた、或いは人間関係の重要性を考えたというような啓蒙に関する記述や、グループでの交流が楽しかったという記載が多く、有効性がある程度示されているといえよう。

今後の課題は、プロジェクトが進行し、様々なワイがやカレッジの講義内容について、参加した直後だけでなく、持続的な効果が見られたかを検証する必要がある。

Q4. 住民間のリアルとバーチャルの複層的なネットワークの構築により、住民間の絆は強まる/拡大するの
か

いまだVAメイちゃんのモニターが少なく、回答する段階に至っていない。パソコンに搭載されたメイちゃんを自宅に置くことには抵抗感が強いとみられるため、今後はスマホによる運用も検討していく必要がある。

Q5. 住民向けイベント・生涯教育の実施により、地域の担い手を育成できるのか。

2024年度は、3回目のワイがやフォーラムで、ワイがやサポーターの募集をし、企画の途中から参加いただいた。これにより、スモールスタート期間ではすべて大学側が企画・運営してきたのに比し、住民の方の意見を取り入れることができた。4回目のフォーラム「ウィンターパーティ」では、さらに一歩進めて、企画の段階から一緒に行ってもらい「ウィンターパーティ」を実施した。これは大学と住民の対等な立場で協働となった。よって、地域の担い手の萌芽といえるのではないかと思う。

今後の課題は、2024年度はイベント開催時にそれぞれ組織化したものであったため、イベントが終了した後も継続するような活動に発展させることが課題である。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

本プロジェクトでは5つの目標を掲げている

目標1. 心と身体から見た社会的孤立・孤独の関連をあきらかにする

目標2. 既存ネットワークの連携とバーチャル・コミュニティの融合

目標3. 住民リーダーの育成

目標4. サードエイジ・ユニバーシティによる人生100年時代のレディネス/レジリエンスを高める

目標5. 孤立予想モデルの構築

目標1については、1回目の全住民を対象としたアンケート調査の回収率は低く、その回答者から身体機能などマルチモーダルな調査のモニターを募集したが、協力者は少なかった。また賃貸住宅であるため、転居してしまう場合もあり、縦断データの獲得は分析に足るサンプル数を集めるのは厳しい状況にある。

目標2については、バーチャルネットワークを作る手段として、VAメイちゃんをインターフェースとして、ICT利用に慣れてもらうことを目指していたが、実際に家に置くということに対して想像以上に抵抗が強く、予定通りには進んでいない。

目標3についてはワイがやパートナーの組織化により実現の途上にあるといえる。

目標4についても、分析中ではあるが、自由記述の分析により、住民の方たちに人生の捉えなおしを促しているといえる。

目標5についても、住民全体を対象とした質問紙調査への回答が少ないため、厳しい状況にある。2023年に続いて2024年に2回目の質問紙調査を追跡調査と位置づけて実施した。1回目の調査では回収率が13%であり分析対象のサンプル数が少なかったが、2回目調査では改めてグリーンヒルズ六甲の20歳以上の住民全員を対象として調査を行ったところ回収率は約26%となった。縦断調査のデータではモデルの構築は難しいため、横断調査データを用いて分析を進め、モデルを構築していく予定である。

・各実施項目で得られた結果や成果を俯瞰・統合した結果分かったこと

ワイがやフォーラム、ワイがやカレッジのアンケート調査の結果からは、住民間のネットワークが形成されていることは明らかであり、住民自身がこのようなゆるやかなつながりを求めていることが示唆される。社会関係の重要性について、これまでの生活では気づかず、プロジェクトに参加することで初めて気づく人が多いことが明らかになった。また講義を聴くだけでなく、それについて住民同士で話し合うことが学習を深めている様子も読み取れる。行政による生涯教育は少なからず提供されているが、交流という観点に乏しいものが多い。本プロジェクトからの知見を生涯教育の現場に提供していく意義を確信している。

・当該年度に明らかになった次年度に向けての課題とその解決方法の検討

バーチャル・コミュニティの発展が進んでいない。今後はスマートフォンで気軽に使えるアプリの開発に取り組む。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024/6/7	URとの打ち合わせ	神戸大学会議室	2023年度の調査およびワイがや関連の結果報告と2024年度の実施内容の検討

2024/6/12	YYカフェとの打ち合わせ	グリーンヒルズ六甲集会所	ワイがや七夕の会をYYカフェ共催にすることおよび内容の相談
2024/6/20	YYカフェとの打ち合わせ	グリーンヒルズ六甲集会所	七夕の会に必要な物品を確認した
2024/6/27	住民ボランティア	大学研究室	住民からボランティアとしてイベントの開催の協力の申し出を受け、役割分担などを相談した
2024/7/3	研究室プロジェクトメンバーでの打ち合わせ	神戸大学研究室	七夕の会の運営の打ち合わせ
2024/7/7	七夕の会	グリーンヒルズ六甲集会所	神戸大学学生団体なごぶい・YYカフェ共催による地域イベント
2024/7/25	中村研究室との打ち合わせ	神戸大学研究室	中村研究室より、VAメイちゃんに搭載する機能の紹介と今後の予定の説明を受けた。VAメイちゃんが質問の内容に尺度項目を含めることを検討した。
2024/8/2	研究室プロジェクトメンバーでの打ち合わせ	神戸大学研究室	2024年度のワイがやフォーラムおよびカレッジの内容の検討をした。 ワイがやプロジェクトのホームページの内容の検討をした。
2024/9/9	研究室プロジェクトメンバーでの打ち合わせ	神戸大学研究室	ワイがやパートナー説明会のフライヤーの内容および進め方の検討をした
2024/10/11	ワイがやパートナー説明会(第1回)	グリーンヒルズ六甲集会所	ワイがやプロジェクトにおいて開催する地域交流イベントの担い手を募集した
2024/10/19	ワイがやパートナー説明会(第2回)	グリーンヒルズ六甲集会所	ワイがやプロジェクトにおいて開催する地域交流イベントの担い手を募集した
2024/10/23	URとの打ち合わせ	神戸大学会議室	2024年度取り組みの方針と目的の共有をした
2024/10/24	中村研究室との打ち合わせ	神戸大学研究室	VAメイちゃんが質問をするときのシステムについて説明を受けた
2024/10/25	研究室プロジェクトメンバーでの打ち合わせ	神戸大学研究室	第1回ワイがやカレッジの進行の確認 地域住民のICT利用を促進するための工夫を検討した
2024/10/30	ワイがやパートナーミーティング	グリーンヒルズ六甲集会所	地域交流イベントワイがやフォーラムとして「何をしたいか」についてブレインストーミングを行っ

			た
2024/11/4	第2期第1回ワイがやカレッジ	神戸大学大会 議室	「ウェルビーイングってなんだろう？」 (片桐恵子)
2024/11/11	ワイがやパートナーミーティング	グリーンヒルズ六甲集会所	10/30ブレインストーミングの回答をもとに、ワイがやフォーラムの内容の絞り込みをした
2024/11/23	第2期第2回ワイがやカレッジ	神戸大学大会 議室	「暖かい住まいで健康に暮らそうーヒートショックから身を守る」 (小川まどか)
2024/11/23	ワイがやパートナーミーティング	神戸大学大会 議室	ワイがやフォーラムの内容を確定した
2024/12/5	ワイがやパートナーミーティング	グリーンヒルズ六甲集会所	ワイがやフォーラム当日のイベントの内容の具体的な内容の共有と役割分担 当日までに各自で準備することを割り振りした
2024/12/13	ワイがやパートナーミーティング	グリーンヒルズ六甲集会所	ワイがやフォーラム「ワイがやウインターパーティ」の飾りつけやゲームなどを皆で準備したり、会場のレイアウトを確認した
2024/12/20	ワイがやパートナーミーティング	グリーンヒルズ六甲集会所	ワイがやフォーラム「ワイがやウインターパーティ」の前日準備をワイがやパートナーとともにいった。
2024/12/21	ワイがやフォーラム「ワイがやウインターパーティ」	グリーンヒルズ六甲集会所	地域交流イベントであるワイがやフォーラムをワイがやパートナーとともに開催した。
2024/12/26	中村研究室との打ち合わせ	神戸大学研究室	VAメイちゃんに関連する研究の進捗の共有 VAメイちゃんが双方向のやりとりによって関係性を構築できるシステムにすることが可能か検討した
2025/1/10	研究室プロジェクトメンバーでの打ち合わせ	神戸大学研究室	第3回カレッジ進行の打ち合わせ
2025/1/23	中村研究室との打ち合わせ	神戸大学研究室	ヴァーチャルコミュニティのツール作成、メイちゃんのカスタマイズに関する進捗共有

2025/1/26	第2期第3回ワイがやカレッジ	神戸大学大会議室	「ICTで超高齢社会に備えようー在宅で自立生活を送るための情報通信技術」(中村匡秀)
2025/2/15	第2期第4回ワイがやカレッジ	グリーンヒルズ六甲集会所	「A COFFEE & WAIGAYA DAY シニアコーヒーチーム「淹」がやってくるヤァ!ヤァ!ヤァ!」(LANDMADE 上野真人・シニア男性コーヒーチーム淹のメンバー)
2025/2/27	中村研究室との打ち合わせ	神戸大学研究室	VAメイちゃんに関連する研究の進捗の共有(学会発表資料) VAメイちゃんをUIとして活用するシステムのアイデア共有、バーチャル・コミュニティのツールの実演
2025/3/3	研究室プロジェクトメンバーでの打ち合わせ	神戸大学研究室	第5回カレッジ進行の打ち合わせ 2025年度に向けてのプロジェクトの内容の整理
2025/3/9	第2期第5回ワイがやカレッジ	グリーンヒルズ六甲集会所	第二期終業式”つなぎ”のデザインで生まれる「まちの部活動」(KIITO加藤慧)

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

・本プロジェクトのフィールドは、もともとの地域ボランティアグループが存在していたという利点はあるが、そのほかは、大きな特徴はなく、平凡な賃貸住宅でのコミュニティづくりという点で、本プロジェクトは全国どこにでも展開可能であるという特徴を持つ。さらに、プロジェクトのメインの介入プログラムである、「ワイがフォーラム」と「ワイがやカレッジ」の性質の違いがもたらす違いと、それらの組み合わせが補完的な役割を果たし、より有効な効果につながるということが明らかになってきた。

「ワイがやフォーラム」は地域の住民が気軽に参加できるイベントであり、より多くの地域住民の関心を引くことに成功し参加層の幅を広げており、本プロジェクトの参加層の裾野を広げる機能を持つことが昭になった。それは10歳未満の子どもから90歳代の高齢者までという参加者の年代層の広がりから明らかである。一方「ワイがやカレッジ」は複数回実施するカレッジの中で、参加者の中からコア層を育む機能があり、それが、「ワイがやパートナー」という大学とともにワイがやフォーラムを実施するパートナーの発現をもたらした要因であるといえる。

さらに、ワイがやカレッジでは、前半は講師によるレクチャー、後半はその日のトピックに関してグループで話し合うという形式をとっており、これが二つの効果をもたらしている。一つ目は、グループによる話し合いをすることで、その日学んだトピックを自らの知識・経験として咀嚼し、自らの学びを獲得する、という大人の学びを実現することができたという効果である。二つ目は、グループの話し合いは、グループメンバーを知る機会

をもたらし、住民間の交流とネットワーク形成を可能にした、ということである。ワイがやカレッジの感想で、唯一ネガティブなコメントがこのグループワークに関してなのであるが、それは時間が足らなかった、というコメントであり、この住民間の交流機会が、参加者にも楽しさ・大きな喜びをもたらしている様子が明らかになった。つまり、孤独・孤立を予防する大きな役割を果たしているといえよう。

自治会などでいわゆる高齢者大学が実施されているが、単に知識の提供・伝達をすることが目的であり、本プロジェクトのような参加者間の交流は視野に入っていないものがほとんどである。本プロジェクトからは、知識だけでなく、交流する機会を設定することにより、お互いの理解が深まり、参加者間のネットワーク形成にも役立つことが明らかになった。

このようなワイがやプロジェクトという誰でも気軽に参加できるイベントと、ワイがやカレッジの組み合わせでの実施は、どこでも展開可能なプロジェクトの本質であることが明らかになってきた。

4. 研究開発実施体制

(1) マネジメント体制

研究総括グループリーダー片桐がプロジェクト全体のマネジメントを行う。3つのグループリーダーと定期的に打ち合わせを実施して運営する。また研究協力者とも定期的に打ち合わせを開催し、適宜プロジェクト内容の見直し等を行う。

グループリーダーはそれぞれのグループの役割の実施につき、マネジメントを行う。

(2) グループごとの概要

研究総括グループ (片桐恵子)

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター、大学院人間発達環境学研究科

実施項目：実施体研究プロジェクト全体の企画と運営。

グループの役割の説明：本グループにおいては、他のすべてのグループと協議し、研究協力者からの意見を取り入れ、また研究2のインタビュー調査から、住民の要望を聞き取り、プロジェクト内容等の見直しをしながら、プロジェクトを実行する

ネットワークングループ (打田篤彦)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

実施項目：リアルなグループと地域住民の連携を図る

グループの役割の説明：本グループは、リアルで行うグループ活動交流と生涯教育の実施、バーチャルグループと連携を取りながら、リアルなコミュニティでの交流をバーチャルなコミュニティの構築につなげる。

測定グループ (原田和弘)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

実施項目：調査の実施、データの統合・解析

グループの役割の説明：本グループは[調査1]～[調査3]の実施を担当。[調査4]について

は、バーチャルグループと連携しながら、統合したデータベースを構築

バーチャルグループ (中村匡秀)

神戸大学数理・データサイエンスセンター

実施項目：IoTを活用した調査実施

グループの役割の説明：住民モニター宅にセンサーを設置し、継続的にデータを収集する。VAメイちゃんとの会話による調査の実施とそれに伴うメンテナンスの実施。インターネットによる交流ができるよう、モニターの指導とフォローアップを行う。住民の趣味とマッチングした地域活動情報を提供するアプリの開発・運用

5. 研究開発実施者

研究総括グループ (リーダー氏名：片桐恵子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
片桐 恵子	カタギリ ケイコ	神戸大学	ウェルビーイング先端研究センター	教授
平山 洋介	ヒラヤマ ヨウスケ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	教授
打田 篤彦	ウチダ ア ツヒコ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	助教
小川 まどか	オガワ マ ドカ	神戸大学	ウェルビーイング先端研究センター	学術研究員
竹内 真純	タケウチ マスミ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	学術研究員
福沢 愛	フクザワ アイ	武蔵野大学	人間科学部	講師
Kim Nahyun	キム ナヒ ョン	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	D3
三浦(安里) 知陽	ミウラ チ ハル	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	学術研究員

平田 充宏	ヒラタ ミ ツヒコ	神戸大学	学術研究推進 機構学術研究 推進室	政策研究職員
佐々木 由香	ササキ ユ カ	神戸大学	ウェルビーイ ング先端研究 センター	教育研究補佐 員

ネットワーキンググループ (リーダー氏名：増本康平)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
増本 康平	マスマト コウヘイ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	准教授
打田 篤彦	ウチダ ア ツヒコ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	助教
金子 由芳	カネコ ユ カ	神戸大学	大学院国際協 力研究科	教授
伊藤 真之	イトウ マ サユキ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	教授
稲原 美苗	イナハラ ミナエ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	准教授
加藤 慧	カトウ ケ イ	デザイン・クリエ イティブセンター	神戸企画事業 部門	スタッフ
Kim Nahyun	キム ナヒ ョン	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	D3
三浦(安里) 知陽	ミウラ チ ハル	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	学術研究員
張 芯月	チョウ シ ンゲツ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	M2
中野 篤	ナカノ ア ツシ	神戸大学	国際人間科学 部	学部4年 部

バーチャルグループ (リーダー氏名：中村匡秀)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
中村 匡秀	ナカムラ マサヒデ	神戸大学	数理・データ サイエンスセ ンター	教授
陳 思楠	チェン シ ナン	神戸大学	大学院工学研 究科	助教
松川 晃徳	マツカワ アキノリ	神戸大学	大学院工学研 究科	M1

測定グループ (リーダー氏名：原田和弘)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
原田 和弘	ハラダ カ ズヒロ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	准教授
木村 哲也	キムラ テ ツヤ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	准教授
佐藤 幸治	サトウ コ ウジ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	准教授
石原 暢	イシハラ トオル	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	助教
木伏 紅緒	キブシ ベ ニオ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	助教
打田 篤彦	ウチダ ア ツヒコ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	助教
片桐 恵子	カタギリ ケイコ	神戸大学	ウェルビーイ ング先端研究 センター	教授
Kim Nahyun	キム ナヒ ョン	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	D3

山崎 朋香	ヤマサキ トモカ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	M2
張 芯月	チョウ シ ンゲツ	神戸大学	大学院人間発 達環境学研究 科	M2

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・神戸大学広報誌「風」 vol.22 (2024年9月) 神大ACTIONS
- ・ワイがや通信第1期ありがとう号 (2024年7月)

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・Facebook六甲ぐらし ワイがやフォーラム (2023年8月～)
<https://www.facebook.com/profile.php?id=100095267089127>

(3) 学会 (6-4.参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (1 件)

●国際誌 (1 件)

- ・Matsukawa A., Okamoto H., Chen S., Saiki A., Yasuda K., Katagiri K., Nakamura M. Study of Community Event Introduction Service for Promoting In-Home Elderly Social Participation, International Seminar on Application for Technology of Information and Communication (ISemantic), 2024年9月
<https://cs27.org/achieve/data/pdf/1625.pdf>

(2) 査読なし (4 件)

●国内誌 (4 件)

- ・松浦陽介・松川晃徳・Kim Nahyun・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀、VA傾聴サービ

- スの個人適応のための声掛けスケジュールサービスの開発、電子情報通信学会技術研究報告、124(LOIS2024-88): 101-108、2025年3月
- ・松川晃徳・Kim Nahyun・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀、VAと位置情報に基づくお出かけ情報検索サービスの提案、電子情報通信学会技術研究報告、124(LOIS2024-57): 32-37、2025年1月
 - ・雑賀淳朗・キム ナヒョン・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀、高齢者の孤独孤立を解消するためのオンラインサークルサービスの提案、電子情報通信学会技術研究報告、124(LOIS2024-54): 15-20、2025年1月
 - ・松川晃徳・キムナヒョン・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀、音声対話エージェントが在宅高齢者の孤独に与える影響: 対話ログと孤独感尺度による分析、電子情報通信学会技術研究報告、124(SC2024-25): 13-20、2024年11月

6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

- (1) 招待講演(国内会議 0 件、国際会議 0 件)
- (2) 口頭発表(国内会議 4 件、国際会議 1 件)
- ・松浦陽介・松川晃徳・Kim Nahyun・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀(神戸大学)、VA傾聴サービスの個人適応のための声掛けスケジュールサービスの開発、電子情報通信学会、2025年3月
 - ・松川晃徳・Kim Nahyun・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀(神戸大学)、VAと位置情報に基づくお出かけ情報検索サービスの提案、電子情報通信学会、2025年1月
 - ・雑賀淳朗・キム ナヒョン・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀(神戸大学)、高齢者の孤独孤立を解消するためのオンラインサークルサービスの提案、電子情報通信学会、2025年1月
 - ・松川晃徳・キムナヒョン・陳思楠・片桐恵子・中村匡秀(神戸大学)、音声対話エージェントが在宅高齢者の孤独に与える影響: 対話ログと孤独感尺度による分析、電子情報通信学会、2024年11月
 - ・Keiko Katagiri & Nahyun Kim(神戸大学)、Mitigating Social Isolation and Loneliness Among Residents in Suburban Housing Complexes in Japan、The Gerontological Society of America 2024 Annual Scientific Meeting、2024年11月
- (3) ポスター発表(国内会議 2 件、国際会議 0 件)
- ・小川まどか(神戸大学ウェルビーイング先端研究センター・大阪大学人間科学研究科)・Kim Nahyun(神戸大学)・片桐恵子(神戸大学ウェルビーイング先端研究センター)、都市賃貸集合住宅に暮らす中高年の老後の準備行動への取り組みの年齢による違い、日本老年社会学会第66回大会、奈良、2024.6.1-2
 - ・片桐恵子・Kim Nahyun、賃貸集合住宅居住者の緩やかな絆の形成を目指すアクションリサーチ生涯学習による社会的孤立・孤独の一次予防、日本老年社会学会第66回大会、奈良、2024.6.1-2

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (0 件)

(2) 受賞 (2 件)

- ・国際会議iSemantic2024 (2024年9月) にて、Best Paper Awardを受賞した。
(Study of Community Event Introduction Service for Promoting In-Home Elderly Social Participation, Akinori Matsukawa, Hiro Okamoto, Sinan Chen, Sachio Saiki, Kiyoshi Yasuda, Keiko Katagiri, Masahide Nakamura)
- ・神戸大学若手フロンティア研究会 (2024年12月) オープン部門 (部門賞) で優秀賞を受賞した。(VAを活用したリアルワールドデータ分析, KIM Nahyun, 松川 晃徳, 中村 匡秀, 片桐 恵子)

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)